

第4章 災害発生状況

第4章 災害発生の状況

第1節 産業界における災害発生状況

労働災害による死亡者数は、昭和36年をピークとして長期的には減少してきており、平成14年において労働災害によって亡くなった方は1,658人であり、ピーク時の1/4程度となっている。

最近10年の傾向をみると、全業種における減少幅は、建設業の減少幅によるところが大きく、その結果、業種別の構成比を平成5年と平成14年で比較すると、建設業は42.4%が36.6%と大きく5.8ポイント減少している。

労働災害による死亡者数は、5年連続で2千人を下回り、平成14年は、これまでで最少であった平成13年（1,790人）と比較して132人（前年比7.4%）減少した。

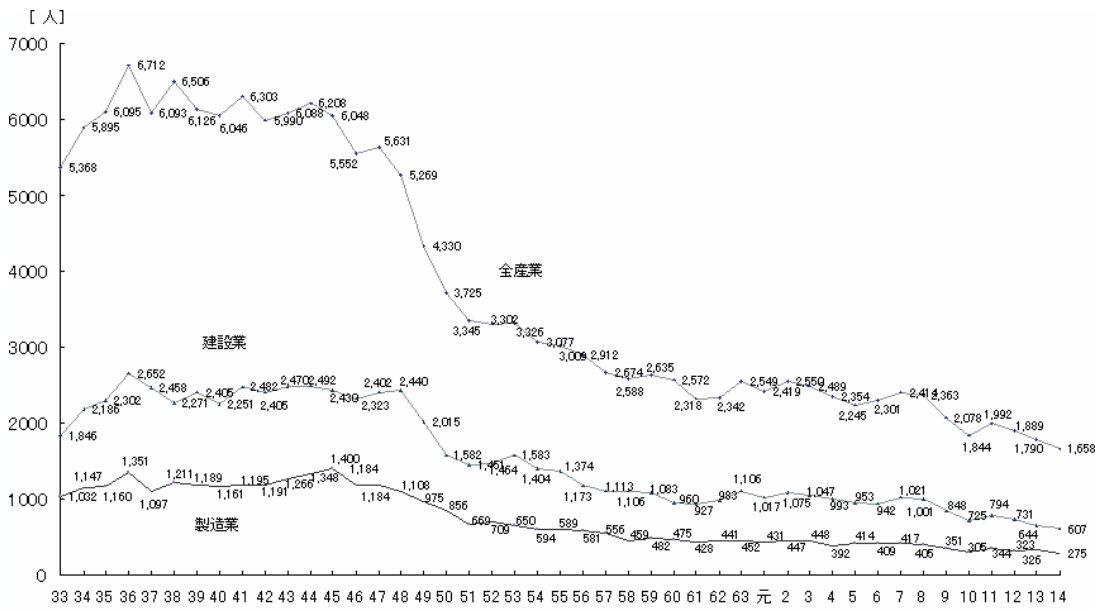


図4-1 労働災害による死亡者数の推移 厚生労働省発表平成15年4月25日

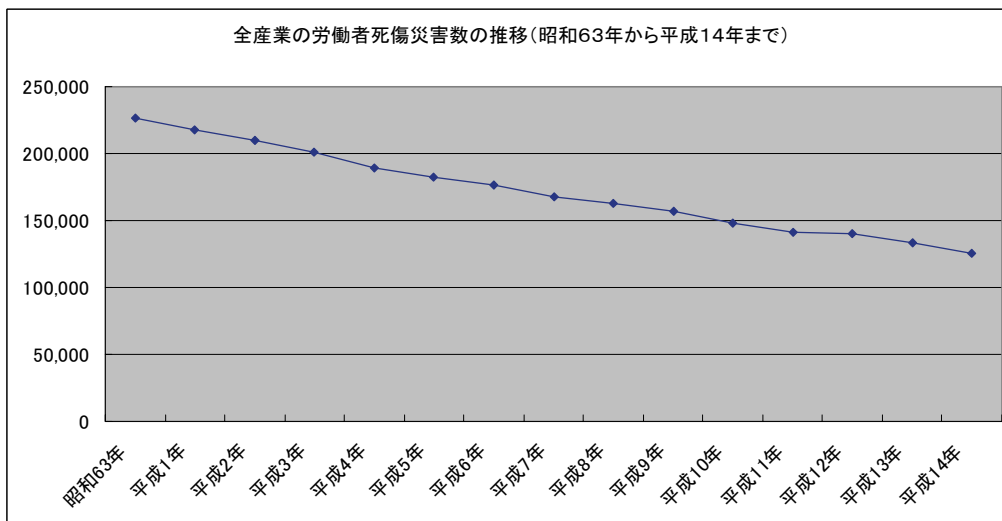


図4-2 全産業の労働死傷者数の推移 (昭和63年から平成14年まで)

資料出所：労働省労働基準局調べ「労災保険給付データ及び労働者死傷病報告（労災非適）」
 中央労働災害防止協会 <http://www.jaish.gr.jp/html/jyoho.html> 職場でできる安全衛生情報より

第2節 訓練現場での災害発生件数と延べ受講者数の推移

雇用・能力開発機構の能力開発施設の実施訓練での平成8年度から平成14年度までの災害発生状況（セミナーを除く）の推移を見ると、災害件数は、延べ訓練時間数（年間訓練受講者数×訓練時間）が増えるにつれて、やや増加の傾向が見られる。（表4-2、図4-3）

しかし、災害件数を延べ訓練時間数で割ってみると、全体としては減少傾向となっている。（表4-3、図4-4）

ポリテクセンターにその傾向が強く、安全対策の成果があったと思われる。しかし、大学校では、あまり減少傾向が見られないことから、今まで以上に、安全対策に取り組む必要がある。

表4-1 延べ訓練時間数の推移

延べ訓練時間数	年度	8	9	10	11	12	13	14
ポリテクセンター人時	ポリテクセンター	1,918,063	2,037,645	2,439,897	2,938,911	2,834,423	3,714,426	3,982,706
ポリテクカレッジ人時	ポリテクカレッジ	1,551,477	1,533,074	1,575,373	1,927,964	1,903,463	2,235,618	2,241,791
合計	合計	3,469,540	3,570,719	4,015,270	4,866,875	4,737,886	5,950,044	6,224,497

表4-2 災害発生件数の推移

災害発生件数	年度	8	9	10	11	12	13	14
ポリテクセンター災害発生件数	ポリテクセンター	155	165	159	227	157	137	165
ポリテクカレッジ災害発生件数	ポリテクカレッジ	83	59	88	70	94	111	103
合計	合計	238	224	247	297	251	248	268

表4-3 件数／延べ時間数の推移

件数／延べ時間数	年度	8	9	10	11	12	13	14
ポリテク災害件数／人時*1000000	ポリテクセンター	80.81	80.98	65.17	77.24	55.39	36.88	41.43
カレッジ災害件数／人時*1000000	ポリテクカレッジ	53.50	38.48	55.86	36.31	49.38	49.65	45.95
合計災害件数／人時*1000000	合計	68.60	62.73	61.52	61.02	52.98	41.68	43.06

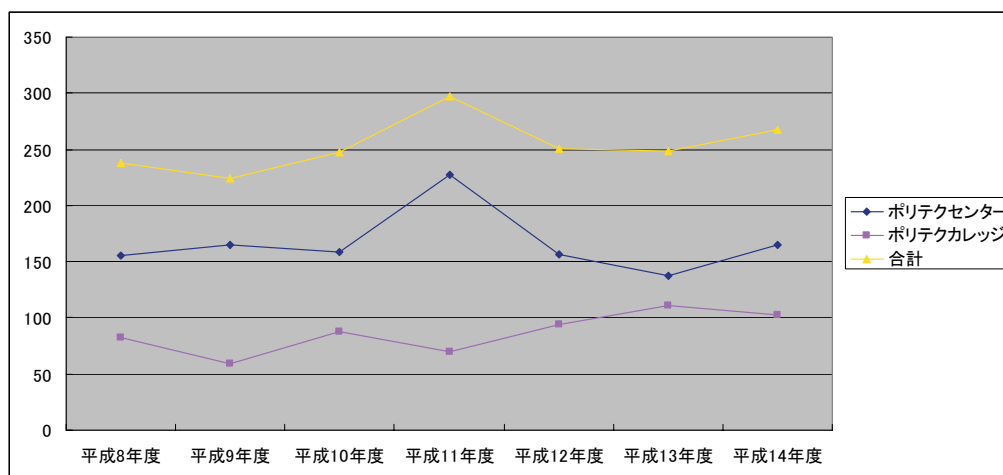


図4-3 災害発生件数

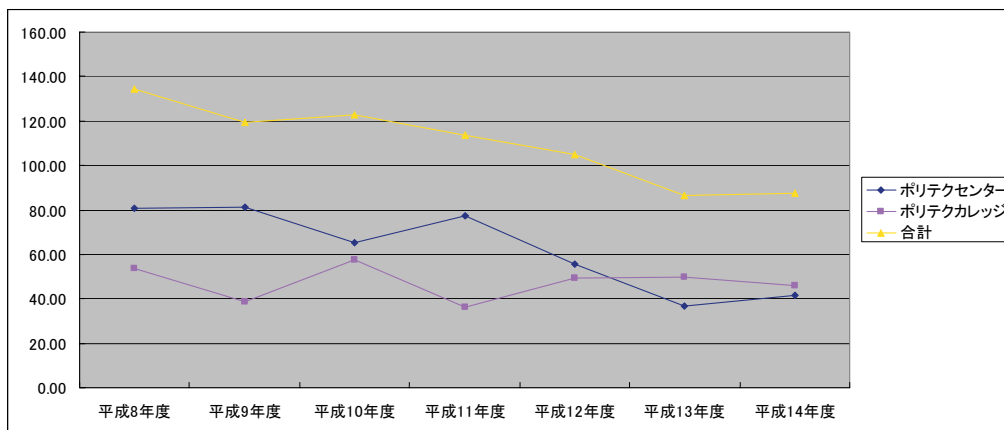


図 4-4 災害発生件数／延べ訓練時間数の推移

第 3 節 雇用・能力開発機構における最近の災害内容の傾向

ここ数年の災害事例を見ると、「機械の点検が悪いために、機械が誤動作して負傷する」、「保護具を着けていなかったために負傷する」といった例はあまりなく、「作業手順を守らないで、おうちゃくをしようとした」、「きちんと安全確認をしていなかった」、などにより起きている災害が多く見られる。また、同じような災害が、同じ施設や機構全体で発生していることも特徴として上げられる。

このようなことから、機構としては、四半期毎に、全国の施設で発生した災害事例集を発行し、類似災害が起こらないよう、安全対策を呼びかけている。

また、災害事例から個別に災害発生状況を見てみると（第 2 章の表 2-1）、圧倒的に手工具での基本作業的での災害件数が多い。特に、のみを用いた作業は「ほぞ穴加工」、「継ぎ手加工」時に左手を刃先に配置していて、刃が滑って切創を負うものが多い。手順に沿った正しい作業の再認識が必要である。

溶接作業においては、溶接スラグの除去中にスラグが目に入ることが多い、ついでスパッタや熱い溶接棒によるやけどである。溶接そのものを終えた後の作業もしくは後片付時での注意や保護具の正しい着用が望まれる。

フライス盤作業においては、クイックチェンジアダプターへの工具の取り付け取り外しの注意事項・禁止事項を守らなかった結果発生したものが多い。

旋盤作業においては、切子を直接接触する等の禁止事項を行ったり、定常的な作業では考えられない不安全作業を行ってしまい災害発生が目立つ。機械加工でよく使用する機器であるため十分な注意が必要である。

ボール版作業においては材料のバイス等での固定を怠ったり手等を負傷したり、切子による負傷である。

脚立からの転落も多く、作業個所の移動に伴い面倒でも脚立を据えなおすことや、固定を怠らないように指導が必要である。

その他に、材料の運搬作業による災害発生が多い。特にこの場合は共同で運搬する場合の合図をおこたり災害に繋がっている例が多い。いずれの場合も基本的な作業手順と禁止事項・注意事項の再認識をさせることで発生を抑えることができる災害事例である。